

REPORT 開催講座・展覧会レポート

令和6年度(第32回) 水道ポスターコンクール展示会

日時: 2024年9月4日(水)～9月8日(日)
主催: 川口市上下水道局
水道への理解と学習の機会を広げるため、市内の小学4年生が描いたポスターを毎年展示しています。今年は「水道」「安全な水」「水への感謝」をテーマに作品を募集し、1,595点の応募のなかから入賞した62作品を展示しました。



〈特選〉 差間小学校・布施 ひなたさん

〈準特選〉 桜町小学校・有住 沙也加さん

生活に欠かれない「水」について考えてみよう。

旧田中家住宅-川口の商家の贅と茶の文化-

日時: 10月12日(土)～11月4日(月)
川口市初の重要文化財である旧田中家住宅についての展覧会を開催しました。味噌醸造業で財を成した田中家ゆかりの品々のほか、地域に縁のある茶道具や蒔絵の作品を展示しました。会期中には川口市長らと交えたシンポジウムや、当館学芸員によるギャラリートークなどのイベントも開催しました。



建築様式など、建物の見どころも紹介。

アートな年賀状展 2025

日時: 2025年1月9日(木)～1月19日(日)

市民の皆さまが描いたオリジナル年賀状を一堂に展示しました。今年の干支「巳」を絵の具や切り絵で表現したものや、新年への願いが込められた一枚など、個性豊かな作品が並びました。会場には、年賀状やへびに関する大きな年賀状型のクイズが出現! クイズに挑戦しながら、日本の正月文化の豆知識を得る機会にもなりました。



個性豊かな力作が勢ぞろい!



アトリア開館から続く恒例企画!



一年間の活動の集大成!

第57回 川口市特別支援学級合同作品展

日時: 2024年12月4日(水)～12月8日(日)
主催: 川口市立小中学校特別支援学級設置校長会

市内の特別支援学級が図工・美術の授業で制作した作品の成果発表展です。55校970名の生徒・児童が出品し、平面・立体作品など1,387点が展示されました。作品を通じて特別支援学級のみなさんの普段の活動を知る機会となりました。

中学生のART CLUB 作品展

日時: 2025年1月25日(土)～2月2日(日)
主催: 川口市教育委員会

市内中学校の美術系文化部が日頃の活動の成果を発表する展覧会です。今年は19校が出品し、絵画やイラストなどの平面作品をはじめ、粘土を使った立体作品、バルーンアートなど約300点が展示されました。

オリジナル福笑いをつくろう!

日時: 2025年1月12日(日)
講師: 玉掛 由美子(∞工房)

ひょっとこやししまいを形をした大きな福笑い。遊んだあと、毛糸やフェルトなど様々な素材を使って自分だけの福笑いを作るワークショップを開催しました。大きな福笑いは、〈アートな年賀状展 2025〉の会期中に開放日を設け、展覧会来場者も福笑い遊びを体験しました。

ペーゴマデコワークショップ ~オリジナルペーゴマをつくろう~

日時: 2025年1月9日(木)、1月12日(日)

講師: HAU'OLI MARKET (ハウオリマーケット)。(協力: 日三鑄造所 中島茂芳)
鑄物の街・川口にゆかりのあるペーゴマをデコレーションするイベントを開催。ペーゴマ本体は鉄製または樹脂製のどちらかを選び、天面にパーツや色を付けてオリジナルのペーゴマを作りました。名人の中島さんに回し方を教えてもらい、遊びと制作を通じて川口の鑄物文化に触れる機会となりました。



パーツや色の組合せは無限大!



ワクワクする新しい福笑いをつくろう!

あなろぐ×AR体験! 妄想から生まれたイロカタチとあそぼう!

日時: 2024年11月9日(土) 成果展示: 11月10日(日)
講師: 妄想公園

大型オブジェの色塗りやAR(仮想現実)を体験するワークショップを開催しました。参加者はスマートフォンのアプリを使用して、カメラに映る現実の風景に、魚や惑星のARを重ねて表示させて、不思議な空間を撮影しました。



ARの不思議空間を体験しよう!

社会体験活動「川口の元気 夢わ〜く」

(川口市立南中学校・領家中学校)

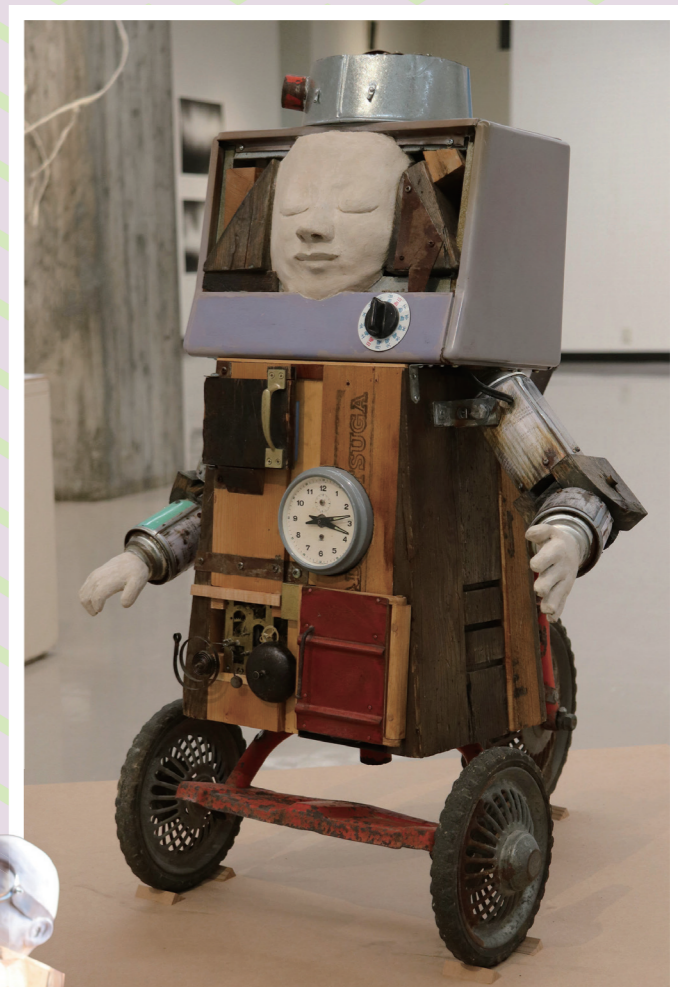
川口市内の中学二年生が行う職場体験活動。今年は、南中学校の5名と領家中学校の3名の生徒さんが、アトリアで行いました。お茶入れや名刺交換をして社会人のあいさつのロールプレイをしたり、アトリアの展覧会やイベントの準備にも携わってもらいました。南中学校・領家中学校のみなさん、おつかれさまでした!



こんにちは。日に日に暖かくなり、桜の開花が待ち遠しい季節がやってきました。今号の表紙は造形作家 田口輝彦さんの作品です。人や動物をモチーフに、ユーモラスでどこか懐かしさを感じる木彫作品を制作されている田口さん。3月にはアトリアで個展を開催しますので、ぜひ実物の存在感や表現の奥深さにふれてみてくださいね。アーティストインタビューは現代根付師 齋藤美洲さん。アトリアでは2024年の企画展「アトリアで、春」に作品を出品いただきました。作品や制作について興味深いお話をたくさん伺いましたので、じっくりとお読みください。春休みからゴールデンウィークにかけては、展覧会や講座のほか、自由参加型イベント「アトリアの窓ガラスに絵を描こう!」なども開催予定です。ぜひアトリアでアート体験を楽しんでくださいね!



田口輝彦「Wheelchair race」(2021)



田口輝彦「希望の子」(2022)

EVENING アトリアの今後のイベント

おもちゃたちのものがたり たぐちてるひこの世界

日時: 3月20日(木)～4月6日(日)
造形作家の田口輝彦氏による個展を開催します。童話から出てきたような作品を、小さなお子さまにも見やすい高さで展示します。

日本画講座-日本画の伝統技法を学び作品を描く-

日時: 4月6日(日)、13日(日)(2日間の連続講座)
講師: 須恵 朋子
にかわ ごぶん いわえのく 膠や胡粉、岩絵具などの本格的な道具・材料を使って作品を描きます。講師の実演を交えながら、日本画の伝統技法を学びます。

春の盆栽に出会う

日時: 4月12日(土)～20日(日)
小さな鉢の中で表現された自然の風景を楽しめる盆栽。春の季節を感じられるしつらえをホワイエで展示します。

展覧会 ワークショップ 講座

伝統盆栽に触れる・楽しむ
日時: 4月20日(日)
講師: 飯村 誠史(盆栽 喜楽園)、針谷 冬美(はちす葉)
剪定や針金かけによる樹形づくりなど、伝統盆栽師から体験しながらじっくりと学べる「ミニ盆栽づくり」を開催します。

アトリアの窓ガラスに絵を描こう!
日時: 4月26日(土)～5月5日(月祝) 講師: AKIYO
アトリアの大きな窓ガラスにみんなで絵を描きます。講師とともに想像を膨らませ、「絵を描く楽しみ」を体験しましょう。

詳細はアトリア HP や広報かわくちをご確認ください。予定は2025年2月末時点のものです。都合により変更する場合があります。

編集後記

新生活が始まる春。アトリアの講座やイベントで、新たな趣味を始めてみてはいかがでしょうか。ご参加お待ちしております!



駐車場はありませんので公共交通機関をご利用ください。
JR川口駅(京浜東北線)東口より徒歩約8分

ATLIA NEWS for TEENS
編集: 岡村春香、武井智子、溝口亜紗、宮澤和気
発行日: 2025年3月1日
発行: 川口市立アートギャラリー・アトリア

SNS やってます!
企画展やワークショップ、イベント等、アトリアの最新情報はこちらをチェック!



Instagram [ID: @art_gallery_atlia]



X (旧 Twitter) [ID: @artatlia]



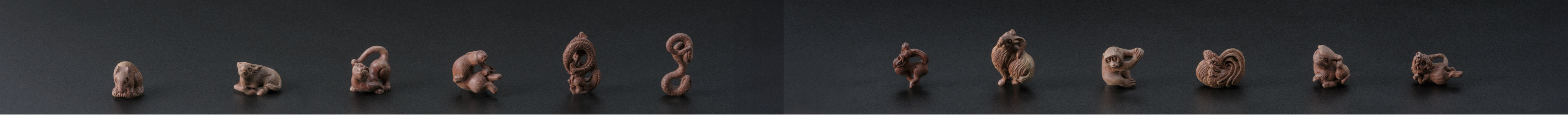
Facebook

川口市立アートギャラリー・アトリア
〒332-0033 埼玉県川口市並木元町1-76
【開館時間】10:00-18:00(最終入館17:30)
【休館日】毎週月曜日(祝日の場合は翌平日)、年末年始、施設整備期間
【TEL】048-253-0222 【FAX】048-240-0525
【Mail】info@atlia.jp



https://atlia.jp/





「十二支」 図版 1

手のひらの中の彫刻ともいわれる根付。

根付とは、巾着などを持ち運ぶとき、着物の帯につける留め具のこと。現代では、その美術的価値が高く評価されています。

川口市内に工房をかまえる齋藤美洲さんは、「BISHŪ」という名でも、世界的に知られる現代根付師です。

動物たちの愛らしい動きと豊かな表情が印象的な作品や、要素を極限まで凝縮した作品など、さまざまな根付を生み出す美洲さんに、ご自身の作品や根付の魅力についてお話を伺いました。

手のひらの中の彫刻

—12種類の動物がモチーフとなっている「十二支」(図版1)は、すべての作品の高さが、ほんの1.5cmほどしかないにもかかわらず、躍動感を覚えました。毛並みやうろこといった細かい部分、そして表情までもとても精緻に作られていますね。

美洲 根付は、身につける飾りですから、どこから見ても魅力的に感じさせる必要があります。いくら小さな物でも、対象がどんな骨格をしているのかなどを、考え抜いて作っているからこそ、見る人は飽きないのでしょうね。

—現代では目にする機会があまりありませんが、根付とは本来どういう物なのでしょう。

美洲 根付とは、緒締(※1)、印籠(※2)、たばこ入れ、巾着などを、着物の帯に吊るすときに、これらが滑り落ちないようにするための留め具です。江戸時代の武士や町人が使い始めたといわれており、だんだんと技巧が凝らされ、装飾的になっていったそうです。現代では日本の男性も、シャツやジャケットのボタンの代わりに、カフスをつけておしゃれをするのと近い感覚ではないでしょうか。

—根付を制作する際、作り手として守っているルールはありますか。

美洲 根付は、本来は着物につける物ですから、生地に引っかからないように滑らかな丸みを持たせなければいけません。また、ひも穴を開ける必要もあります。さらに私の場合、根付は、彫刻のジャンルだと思っているので、どんな小さな物でも必ず自立するように作っています。

—これらの作品は、接地面がほんのわずかしかなかったり、確かに自立しますね。すごいバランスです。根付はどのような材料で作られるのでしょうか。

美洲 代表的な材料は、象牙や、鹿・水牛の角、イノシシの牙、ツゲ・黒檀といった木材です。のみや小刀、やすりなどを使って、形作っていきます。

「愛とこしえ」 図版 3



「豊年踊り」 図版 4



インタビュー
齋藤美洲

掌中の宇宙 制約の中の自由

S
O
I
T
O
H
B
I
S
H
Ū

遊び場は工房、美術館、芸術大学

—美洲さんは、生まれは東京の谷中で、江戸時代から続く象牙彫刻家の四代目にあたります。どのような少年時代を過ごしたのですか。

美洲 自宅の中にあった、父(齋藤昇齋。本名 美和)の工房が私の遊び場でした。工房は出入り自由だったので、骨董屋が持ってくる江戸時代や明治時代の根付や、工房にあった浮世絵などの図録を見る機会も多くありました。それらを見て「あれは良い、これは良くない」と言う生意気なガキでしたね(笑)。

また、上野の国立西洋美術館や東京芸術大学が自宅から近く、自分の庭のように通っていました。この頃見たロダンやマイヨールの西洋彫刻には、今でもとても影響を受けています。

—小さい頃から、お父さまの仕事を継ぎたいと思っていたのですか。

美洲 はい。私は3人きょうだいで、姉と兄がいましたが、象牙彫刻の制作に興味があったのは私だけでした。子どもの頃から暇さえあれば、のみや小刀を持って、何かをコキコキ彫っていましたし、工房が忙しい時には、父の仕事を手伝っていました。

—高校卒業後は美術大学を目指していたそうですが、結局大学には行かずに家業を継ぎます。

美洲 私が高校を卒業する時、父は60歳になる手前でした。当時の男性の平均寿命は65歳くらいだったので、父と一緒にいられる時間はそう長くはないかもしれない。だったら、大学に進むよりは、自分が到底かなわない父の技術を、直接父から学んだほうが良いと思ったんですね。

—大学に行かなかったことに後悔はなかったのですか。

美洲 大学に行かないぶん、夜学でデッサンや彫塑を学んだり、古典根付のモチーフとしても多用されている中国の『三国志』などの古典文学や、孔子・荘子といった思想書を読んだりしていました。美術大学に行かないのは妥協じゃないかと悩んだ時期もありましたが、父は私が働き始めて2年後に亡くなってしまったので、結果的に自分の選択は正しかったと思います。

—美洲さんは、お父さまが手がけていたような大きなサイズの作品は作らずに、根付師として活躍されていますね。

美洲 父は小柄でしたが、自分の背よりも大きな物を彫っている姿は、子ども心にとても格好良く見えました。だけど、大きな象牙彫刻の作品よりも、私は小さな根付に惹かれていました。ですので、自分の作品としては、もっぱら根付を作って発表するようになったのです。

シンプルな造形に魅せられる

—世界的に知られるきっかけとなった代表作「着水」(図版2)は、羽を畳んで降り立つ白鳥を、球体の中に彫り込んだ作品です。シンプルな造形の中に、深さを追求されているように感じます。このような作風に至った理由をお聞かせください。

美洲 私が子どもの頃に見てきた多くの根付は、例えば、花の雌しべや雄しべまでも彫って、いかに細部までを再現できるかというような、作者の腕を自慢するような物ばかりでした。しかし、あるとき光廣(※3)の白鳥の根付作品を見た時に、なぜかドキッとして、いいなあと心に響いたのです。説明的な要素や装飾的な要素は極力削ぎ落とした中にも、どこか温かみを感じられました。—そうした作品をいつか自分も作りたいとお思っていたのですか。

美洲 その時はそこまで深く考えていませんでしたが、私が27歳の頃、アメリカの根付コレクターであるキンゼイ夫妻の来日に合わせて、仲間内で展覧会を開くことになったんです。その際、せっかくなら思い切り自分のやりたいことに挑戦してみようと思いました。

—その作品が、根付の新た



「着水」 図版 2

な境地を開いたと評価され、後にキンゼイ夫妻が出版した『現代根付』という画集の表紙を飾ることになったのですね。

美洲 正直、まさか受け入れられるとは思っていなかったのですが、本当に嬉しかったですね。私の一つの転機になりました。

「愛とこしえ」(図版3)は、「着水」の発展形として作った物です。メビウスの輪をモチーフに、つがいの白鳥の絆を表現しています。この作品では、造形美そのものを追求し、どこまで抽象化できるかに挑戦しています。

制約を超えて、自由に新しいものを

—その後も、「豊年踊り」(図版4)や、「G線上のヘレナ」(図版5)など、生命力が感じられ、オリジナリティあふれる根付の作品を次々と発表されます。作品を制作する上で、大切にしていることはありますか。

美洲 根付は、実際に使われなければいけないという制約がありますが、その制約を守りさえすれば、どんな表現をしてもかまいません。そこが根付の面白さだと思います。私は今82歳ですが、自信作と言える作品には、いまだにたどり着いていません。それができるまでは、これからも仕事を続けていきます。

(取材・文 岡村春香)



齋藤 美洲

1943年 東京都生まれ
1962年 父・齋藤昇齋に師事。太平洋美術学校にてデッサンと彫塑を学ぶ
1977年 根付研究会(現・国際根付彫刻会)発足、会長となる(～1995年)
1981年 大英博物館 作品買い上げ

主な収蔵先

大阪歴史博物館、京都清宗根付館、キンゼイコレクション、大英博物館、東京国立博物館(高円宮コレクション)

※1) 袋・巾着(きんちやく)などの口にまわした緒を束ねて締めるための具。多くは球形で、玉・石・角・練り物などで作る。緒止め。(出典:デジタル大辞泉)

※2) 安土桃山時代以降、主に武士の間で愛用された小型の装身具。当初は印章、印肉を入れていたことからこの名になったが、後に薬などを入れて携帯されるようになった。

※3) 大原光廣。江戸時代末期から明治時代に、大阪、京都、江戸で活躍した根付師。1810-1873年。卓越した造形力とモダンな作風で評価される。

Photo: Kozo Kaneda (左ページより4点)

「G線上のヘレナ」 図版 5

